

大学キャンパスが守る街の自然環境

野寄 玲児 ●神戸女学院大学教授



兵庫県西宮市

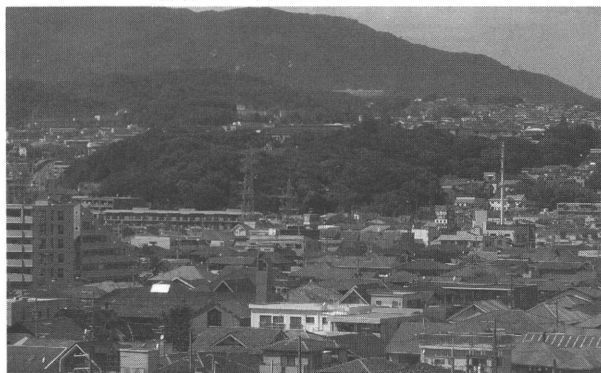
阪神間に位置する西宮市は、関西学院大学、聖和短期大学、神戸女学院大学、武庫川女子大学、甲子園短期大学、大手前大学、兵庫医科大学、甲南大学CUBEと、大学・短期大学が九つもある大学の街である。中でも本学や関西学院が立地する上ヶ原地区は、一九五八年に日本で二番目の文教地区に指定されており、健全な教育環境を守るために娯楽施設などの建設が条例で規制されている。さらに当地区一帯は、甲山や仁川溪谷、東六甲などを含む広大な東六甲山風致地区の一角として、市の第三種風致地区にも指定されており、建物の高さや建ぺい率、緑地率や木竹の伐採などに対して各種の制限が設けられている。最近の大手不動産会社によるアンケートでは、当地区の表玄関にあたる阪急電鉄西宮北口駅周辺は、「関西で住みたい街」のトップにランクされる人気エリアである。神戸や大阪へのアクセスの良さ、阪急西宮ガーデンズや兵庫県立芸術文化センターなどの商業・文化施設の充実が人気の理由であろうが、カレッジタウンとしての知的で洗練された街の雰囲気も一役買っている。

神戸女学院岡田山キャンパスは、この上ヶ

原地区の南東端を占め、面積十四ヘクタール、標高約五十メートルの通称「岡田山」と呼ばれる半島状の高台に位置している。高名な建築家W・M・ヴォーリスの手によるスパニッシュ・ミッシェン・スタイルの優美な校舎群は、二〇〇九年、関西学院の時計台や武庫川女子大学の甲子園会館（旧甲子園ホテル）とともに、国の登録有形文化財に登録されている。キャンパスでは、春には満開のサクラ、秋にはモミジやイチョウの紅葉が建物と調和して、ひととき美しい景観を見せる。今年は、本学が神戸の山本通りからこの地に本拠を移してちょうど八十年にあたるので、十月にはヴォーリス建築をテーマとしたシンポジウムも企画されている。神戸女学院大学は、日本で最も古い女子ミッシェンスクールの一つとして、また先進的な英語教育の実践で知られてきたが、実は意外と知られていない一面がある。それは、大都市圏の一角にありながら、極めて豊かな自然環境を保つキャンパスのたずまいである。

写真は、西宮市大学交流センターのあるACTA西宮（阪急西宮北口駅）から望む岡田山の「威容」である。街の背後に巨大な獣が

西宮北口より岡田山キャンパスを望む



迫りくるかのような錯覚すら覚えるが、この深い緑に包まれた山の上に美しいキャンパスが広がっていることは、樹冠に半ば埋もれた赤い瓦屋根の存在でわかる。キャンパスの敷地の約三五％は、コナラやクスノキ、ヒメユズリハ、アラカシなどからなるうつそうたる天然林に覆われており、絶滅危惧種を含む約六百種の野生植物の生育と、約九十種の野鳥、タヌキやイモリなど各種の野生動物の生息が確認されている。この豊かな自然は、講義や実習などの教育活動のみならず、

各種の地域貢献活動にも広く利用されている。

岡田山には「山」という名がついているが、地形的には、斜面の上に平坦な高台が広がる「洪積台地」に該当する。約百万年前以降に古大阪湾に堆積した大阪層群という地層が、その後の数次の気候変動や地殻変動によって陸上に現れたのが現在の岡田山の基盤をなしている。海底では地層が平らに積もるので、

陸上に現れた地層もテーブル状を呈するのである。ヴォーリズによるキャンパスプランの図面を見ると、大学や講堂、体育館、学生寮などの主要建物群やグラウンドが台地上の平坦面にフランス良く配され、斜面には広大な森が残されている。例外は音楽館で、周囲から騒音が入らないように両側を尾根に囲まれた谷間に建てられている。建物の数は増えたものの、キャンパスの基本的な姿は今も変わらない。自然の地形を巧みに生かしたヴォーリズのキャンパスプランが、岡田山に豊かな自然を残したと言える。

斜面の森の大部分は、八十年の時を経てアカマツの雑木林から、照葉樹を交えたうつそうたる天然林へと発達した。この豊かな緑が静謐な教育環境や生態系を守るのみならず、都市の防災機能を高め、震災時などに人々の命を守る砦となることは、かつて阪神地域があまたの尊い犠牲を払って学んだ教訓の一つである。

最初に述べたような土地の用途規制が環境や景観の保全に寄与することは確かであるが、これらの施策だけでは自然を守ることはできない。実際、岡田山のすぐ西隣に「愛宕山」という似た形の台地があつて、全く同じ用途規制（文教地区及び第三種風致地区）を受けているが、急斜面に至るまでほぼ全面的に宅地化されて景観は一変している。岡田山では、大学の存在が広大な森を残すことにつながったのであるが、この緑の存在が周辺地域を含む都市開発の免罪符であつてはならないのである。

地域社会の健康と福祉に貢献する人材を

矢田 眞美子 ● 関東学院大学看護学部長

一 はじめに

関東学院は、一八八四（明治十七）年に横浜山手に創立された「横浜バプテスト神学校」を源流とする歴史と伝統ある学園である。「東京中学校」と称した旧制中学校（男子校）の流れをもくんで、一九二七（昭和二）年に「財団法人関東学院」の設立を経て、今日に至る百二十九年の伝統に立っている。「横浜バプテスト神学校」は、アメリカ合衆国の北部バプテスト教団の信徒による祈りと援助によって始まった。

そして、彼らの祈りと援助が本学院発展の基礎を築いたことにより、その教育の理念を、「キリスト教に基づき学校教育を行うことを目的とする」とし、絶えずその実践に努めてきた。この教育の理念は、横浜バプテスト神学校初代校長 A・A・ペンネットの墓碑銘 He lived to serve と、関東学院になってからの初代学院長坂田祐によって選定された校訓「人になれ 奉仕せよ」に具体的に示されている。

校訓「人になれ 奉仕せよ」は、人間であることを深く自覚し、人間らしい人間になることを教育の基本命題にしたも

のであり、人間らしい人間、他者、隣人、弱者に愛をもって奉仕する者になることを説いている。学院の教育理念を示すこの校訓は、今日の日本の社会、とりわけ、教育の現場が抱えている課題に取り組む際の基本姿勢を担いうるものと確信している。現在、本学院は、大学・大学院、高等学校二校、中学校二校、小学校二校、こども園二園を有する総合学園に発展している。

本学院は、二〇〇九（平成二十一年）年に創立百二十五周年を迎えたことを契機として、二〇一〇年度に校訓「人になれ 奉仕せよ」を基本とするグランドデザインを策定した。これを受けて、関東学院大学では教育理念などの見直しに着手し、二〇一一（平成二十三年）三月に大学としての教育理念等を決定した。新たに決定された関東学院大学の教育理念は、「キリスト教の精神に基づき豊かな人間性を培い、学生一人ひとりに向き合う教育によって個性と知性を磨き、社会において主体的に自立して生きるための知識と技術を養い育てることにより、社会的使命を自覚して二十一世紀共生社会に貢献する人材を育成する」である。看護学部は、その教育内容及び





養成する人材像から、関東学院大学の新しい教育理念に最もかなった学部であると考えられた。

今日のわが国の保健・医療・福祉を取り巻く状況から、看護専門職の役割の重要性が増しており、これらに対応できる看護実践能力を身につけた人材を育成するためには、充実した看護教育を行うことができる四年制の学士課程（大学）教育が重要である。かねてより隣接する国家公務員共済組合連合会横浜南共済病院から看護学部新設への強い要望があった

こと、神奈川県が全国で最も看護職員数が不足する地域であることなどから、地域社会に貢献することのできる看護学部の設置が決定された。二〇一三（平成二十五）年四月に看護学部を新設し、同時に工学部を理工学部と環境・建築学部に改組し、関東学院大学は七学部大学院五研究科を有する総合大学として新たな歩みを始めている。

二 看護学部の教育理念と教育目標

本学部の教育理念は「豊かな人間性と他者を思いやる心、高い倫理観のもと、基本的看護実践能力、主体的に自己研鑽できる力を持ち、『人になれ 奉仕せよ』の校訓のもと人々の尊厳を基底にし、看護専門職として地域社会の人々の健康と福祉に積極的に貢献できる人材を育成する」と定めた。この教育理念に基づき、教育方針は「キリスト教の精神に基づく人格陶冶と社会貢献機能の使命を踏まえ、幅広い職業人養成とくに豊かな人間性を具え、保健・医療・福祉の現場において適切な看護ケアを提供できる看護実践能力とチーム医療における調整能力を身につけ、疾病の予防を含め人々の健康と福祉に貢献できる人材を育成する」ととした。

教育目標は次の七つを設定している。

- (1) 人々の生命の尊厳と権利を擁護できる豊かな人間性と高い倫理観の涵養
- (2) 自己理解と他者理解、間主観的相互作用に基づくケアリングの育成
- (3) 科学的・論理的思考力と創造的探究心、研究志向性の育成
- (4) 看護実践経験とリフレクションによる看護実践知の修得
- (5) 医療の現場において求められる確かな判断力と問題解決能力の育成

(6) 保健・医療・福祉の連携のもと、チーム医療における調整能力や看護の独自性を発揮できる能力の育成

(7) 看護専門職としての成長のために、主体的に自己研鑽することのできる能力の育成

三 教育課程編成の考え方及び特色

本学部は、「人になれ 奉仕せよ」の校訓のもと、豊かな人間性を培い、保健・医療・福祉の現場において適切な看護ケアを提供できる看護実践能力とチーム医療における調整能力などを身につけ、疾病の予防を含め人々の健康と福祉に貢献できる人材を養成するべく教育課程を編成するとともに、看護師国家試験受験資格を取得できるよう「保健師助産師看護師学校養成所指定規則」に準拠して教育課程を編成した。

教育課程は、共通科目（教養分野、外国語分野、保健体育分野）及び専門科目（専門基礎、看護の基礎、看護の展開、看護学の統合と実践）の授業科目区分により構成している。卒業に必要な最低単位数は共通科目二十五単位、専門科目八十七単位、自主選択学習科目十二単位の合計百二十四単位である。

(一) 共通科目

教養分野、外国語分野及び保健体育分野から構成する共通科目は、「人になれ 奉仕せよ」の校訓のもと、学生が人として、また、看護専門職として成長するための土台となる科目区分である。七つの教育目標に掲げた資質や能力の基礎を築くために、人、環境、健康、生活、社会・地域に対する理解

を深め、豊かな人間性と高い倫理観を涵養し、深い洞察力やコミュニケーション能力、問題解決能力を育む科目、科学的・論理的思考力の基礎となる科目を教養分野、外国語分野及び保健体育分野にわたり、四十六科目六十八単位配置した。

本学院の建学の精神（キリスト教の精神に基づく人格の陶冶）を理解するために「キリスト教学」を一年次の必修科目として配置し、加えて、情報処理技術の基礎の修得と情報処理能力の向上を図るために、「コンピュータ・リテラシー」を必修科目として、また「数値データ処理」を選択科目として配置している。また全学共通の「KGUキャリアデザイン入門」は一セメスターの登録必須科目としている。

国際社会における活動が期待される看護専門職に必要な基本的な外国語として、英語は「英語（リーディング）ⅠA」「英語（リーディング）ⅠB」「英語（オーラル）ⅠA」「英語（オーラル）ⅠB」の四科目四単位を必修とした。加えて、英語力の向上を目指す学生のために「英語（リーディング）ⅡA」「英語（リーディング）ⅡB」「英語（オーラル）ⅡA」「英語（オーラル）ⅡB」の四科目四単位を選択科目とした。英語以外の外国語は、「ドイツ語ⅠA」「ドイツ語ⅠB」「ドイツ語ⅡA」「ドイツ語ⅡB」「中国語ⅠA」「中国語ⅠB」「中国語ⅡA」「中国語ⅡB」「ハンガールⅠA」「ハンガールⅠB」「ハンガールⅡA」「ハンガールⅡB」を配置し、より確かな外国語の能力が身につくよう同一言語四科目を選択必修としている。さらに、ドイツ語検定試験を目指す学生のために、「ドイツ

語ⅢA」「ドイツ語ⅢB」を選択科目として二年次に配置している。

(二) 専門科目

専門科目は、教育目標の達成に向けて段階的な学修が進められるよう、専門基礎、看護の基礎、看護の展開、看護学の統合と実践の四分野から構成する科目区分である。

専門基礎は、看護の基礎、看護の展開、看護学の統合と実践における各看護学の学修を支える科目区分であり、「人と健康・健康障害と回復の促進」と「人と環境・健康支援と社会保障制度」の二つの領域に区分した。医療の現場においては、求められる確かな判断力と問題解決能力の育成のためには、その基礎として、人の健康や健康障害と回復の促進についての学修が不可欠である。「人と健康・健康障害と回復の促進」には「身体の構造と機能」「健康と栄養」「病理・病態学」「疾病と治療」「フィジカルアセスメント」などの科目を配置している。保健・医療・福祉の連携のもと、チーム医療における調整能力や看護の独自性を発揮できる能力の育成のためには、人の健康と発達に関わる社会環境や健康支援と社会保障制度についての学修が不可欠である。「人と環境・健康支援と社会保障制度」には、「健康論」「生涯発達学」「社会保障制度」「保健福祉行政論」「公衆衛生」などの科目を配置している。

看護の基礎は、看護学の学修の導入あるいは基盤となる分野であり、看護の展開及び看護学の統合と実践の各分野に共

通する看護の基礎を学修する科目区分であるが、同時に生活支援看護学という看護領域として位置づけられる。自己理解と他者理解、間主観的相互作用に基づくケアリングの育成や、看護実践経験とリフレクションによる看護実践知の修得などにつながるよう、自己理解・他者理解に基づく援助関係、看護の対象者を生活者としてとらえる視点、総合的な判断に基づく対象者のニーズのアセスメント、基本的なニーズを満たすための援助方法等を学修する。

看護の展開は、専門基礎と看護の基礎における学修を基盤として、保健・医療・福祉の現場における看護の展開を学修する科目区分であり、対象の特徴に応じた看護を学修できるよう、「療養支援看護学」「老年看護学」「小児看護学」「母性看護学」「精神看護学」の五つの看護学領域に区分した。看護専門職が備えるべき資質や能力を育成するための主要分野であり、人々の生命の尊厳と権利を擁護できる豊かな人間性と高い倫理観の涵養や、看護実践経験とリフレクションによる看護実践知の修得、医療の現場において求められる確かな判断力と問題解決能力等の育成が図られるよう、各看護学領域に関係の専門科目を配置した。各看護学の理論的知識と技術及び実践知の修得のために、それぞれの領域には、講義・演習・実習を配置しており、臨地実習では、講義・演習で学んだ理論的な知識と技術を看護実践の場面に適用し、看護の理論と実践を結びつけた看護の展開を学修する。さらに、その看護実践の展開過程の振り返りと評価を通して、より実践



的な知識や技術、態度を学修する。また、保健・医療・福祉の連携のもと、チーム医療における調整能力や看護の独自性を発揮できる能力の育成のため、各看護学領域の臨地実習において、チーム医療の一員としての役割や多職種連携協働における看護の役割について学修する。

看護学の統合と実践は、専門基礎、看護の基礎及び看護の展開で学んだ知識と技術を統合し、看護実践及び研究への志向性を高めるための科目区分であり、「在宅看護学」と「看護学的发展と探求」の二つの領域に区分している。保健・医療・福祉の現場において適切な看護ケアを提供できる看護実践能力とチーム医療における調整能力などを身につける仕上がりとしての分野である。「在宅看護学」では、地域保健医療福祉における多職種連携と看護の役割についての学びを基盤に、地域保健医療福祉と在宅看護、在宅看護を必要とする人々と家族のニーズのアクセスメント、在宅療養における生活援助と医療処置管理の

支援、ケアマネジメント等を学修する。「看護学的发展と探求」は、看護学的发展に寄与する研究を志向し、質の高い看護実践を探究する力を高めることを目的とした領域である。科学的・論理的思考力と創造的探究心、研究志向性の育成や、看護実践経験とリフレクションによる看護実践知の修得、保健・医療・福祉の連携のもと、チーム医療における調整能力や看護の独自性を発揮できる能力の育成、そして看護専門職としての成長のために、主体的に自己研鑽することのできる能力の育成などを目的としている。

看護研究への関心と理解を深め、科学的・論理的思考力を高め、リサーチマインドを育むために、「論文講読」「看護研究方法論」「卒業研究」を四年次に必修科目として配置した。また、臨地実習における看護実践の経験と看護理論を結びつけ、リフレクションに基づいて看護実践の本質を探究し看護観を深めることができるよう、「看護理論Ⅱ」を四年次春学期に配置した。さらに、保健・医療・福祉の連携と多職種協働、リーダーシップ、看護マネジメント、看護専門職の政策過程への参画、災害時の保健医療と看護、グローバルヘルスにおける看護などについて幅広く学修するために、「保健医療福祉連携論」「看護管理論」「看護政策論」「災害看護論」「国際看護論」を四年次春学期に配置した。

四年次秋学期に配置した「リカレント教育論」では、卒業後の職業選択や既修の「KGUキャリアデザイン入門」などと関連づけ、四年間の人としての成長と看護専門職としての

成長の振り返り、看護専門職としての今後の展望とリカレントなどについて学修し、看護専門職としての生涯にわたるキャリア形成の基礎的素地とする。

四 本学看護学部の特徴

本学は、医療の高度化や患者・家族のニーズの多様化、チーム医療の推進などに対応していくための教育を充実させるため、看護師の育成に特化した教育課程とした。豊かな人間性を育むために、総合大学である強みを生かして教養科目、外国語科目を充実させたことも本学の特徴と言える。

学生定員は八十名で男女共学である。男子学生の比率を10%ほどと予想していたが、初年度入学生八十四名中十三名（15%）が男子学生であった。入試説明会やオープンキャンパスを訪れる男子高校生も多いことから、今後も男子学生が多い傾向は続くと考えられる。

横浜・金沢八景（室の木）キャンパスは平潟湾に臨む風光明媚な地にあり、人間環境学部（健康栄養学科、人間発達学科、現代コミュニケーション学科、人間環境デザイン学科）と交流できる恵まれた環境と言える。

本学では、対話型、少人数、そして経験学習重視の教育によって学生の個性と知性を磨き、看護の専門職として、主体的に自立して専門性を発揮するための看護実践知、さらに多職種間で協働し、地域社会と連動するための実践知を養っている。この実践知の養成に重要な臨地実習のために、金沢八

景キャンパスに隣接する横浜南共済病院をはじめとして、近隣地区の病院や横浜市地域ケアプラザなど、地域に根ざした実習施設を準備している。また学生一人ひとりに向き合う対話型の教育、少人数教育の一貫としてアドバイザー制度を設けている。五十名の学生グループに担当教員を配置し、毎月一回のグループ活動（文献の講読会やレクリエーションなど）を通して近況報告や情報交換を行い学生一人ひとりに対するきめ細かな指導や支援を行っている。現在は一年次学生のみであるが、来年度以降は学年を超えた交流が図られるよう、一年次生と二年次生からなるグループを編成する予定である。

五 未来に向けて

看護学部は、校訓「人になれ 奉仕せよ」の具現化とともに、自分で考える力、探求する力、自らの問いをもって答えを導き出す力で人と社会に奉仕する人材の育成を目指している。関東学院の百二十九年の長い伝統において看護学部はその一歩を踏み出したばかりである。七つの看護学領域（生活支援看護学、療養支援看護学、老年看護学、小児看護学、母性看護学、精神看護学、在宅看護学）を中心に教育や研究を展開する一方で、他学部との横断的な交流から共同研究などの新しい潮流が生まれることを期待している。時代の要請にこたえて、特色ある最先端の研究を推進し、共生社会の創造とその持続的発展に貢献することを使命（ミッション）とし、大きな夢に向かって邁進していきたいと考えている。

大学で学ぶ／創るポピュラーカルチャー

——音楽とファッションを二つの核として

斎藤 光 ● 京都精華大学ポピュラーカルチャー学部長

一 はじめに

京都精華大学は一九六八年四月に開学した。当初は短期大学（京都精華短期大学）であり、二つの学科から構成されていた。美術科と英語英文科である。

その後、一九七九年に美術学部（二〇〇〇年芸術学部と改称）を、一九八九年には人文学部を開設し、翌々年、短期大学部は廃止された。

二〇〇六年、それまで三十年以上続けてきた二デパートメント制が大きく変更された。芸術学部を母体として、デザイン学部とマンガ学部を創設したのである。さらに二〇一三年四月、マンガ学部を母体として、ポピュラーカルチャー学部が設立され、今日に至っている。

現在、京都精華大学は、五学部四研究科からなる「芸術と

文化の総合大学」であり、大学全体で「表現の大学」を追究している。二〇一三年の在学生は、学部生と大学院生（博士課程も含む）を合わせて三七〇二人を数える。また、これまでに、約三万人が本学で学んだのち、社会の多方面で活躍している。

京都精華大学の建学理念は、ひと言で表すと「自由自治」である。学ぶ場における「自由」と学ぶ場における「自治」を学生・教職員一人ひとりが多様な形で実現していくことが求められる。そこには一義的な正答は存在していない。

この「自由自治」がなぜ掲げられたかを考えるうえで、大学が開設されたころの世界や日本の状況を理解することが不可欠だ。当時、「大学」はどういう状況に取り囲まれていたのだろうか。

一九六八年前後、世界はベトナム戦争をどう評価するかで大きな対立の中にあつた。若い人々の多くは、アメリカ合州



国のベトナムへの軍事介入とそのやり方やそこに協力する勢力に対して、異議を申し立てていた。

一方、日本国内においては、公害問題が顕在化していた。一九六七年にはイタイイタイ病の原因が神岡鉱山の廃水であるということが明らかになり、四日市公害訴訟も提訴されていた。

つまり、世界のシステムや日本のシステムの問題性が明らかになり、それらに対する批判や対抗が試みられていたのである。

当然、「大学」という制度もその基盤が問い直されていた。「大学」は、問題をはらんだシステムとどのように関係すべきか、ということだ。

「自由自治」という建学理念を提示した、初代学長の岡本清一は、一九六八年に、「今日の『失われた大学教育』を、京都の地において回復すること」が使命であると学生に語りかけている。また、「新しい大学創造の仕事を担当しよう」と学生に呼びかけている。

「自由自治」という普遍的理念のもとで、一九六八年前後の旧来の「大学」を乗り越え、システムの問題への解決方法を志向する「新しい大学」を目指して、京都精華大学は形作られた、と言えよう。

この「新しい大学創造」は、大学の構成という面では、そ

の後これまでにない「人文学部」の設置、全く新しい教育研究分野を創出する試みである「マンガ学部」の開設、そして、同じく新領域を開拓する、今回の「ポピュラーカルチャー学部」の新設と続いてきたのである。

二 ポピュラーカルチャー学部の意味

今年四月新設のポピュラーカルチャー学部は、マンガ学部を母体とし、ポピュラーカルチャーを学問と教育の対象とした全く新しい教育研究機関である。

ところで、本学部が対象とするポピュラーカルチャーとは何か、どのような文化の形態なのか、そして、それを学問と教育の対象とする意味は何か、ということを考えてみよう。ポピュラーカルチャーという概念自体、比較的最近新しく日本語文化圏で一般に使われたものだ。したがって、その内容や輪郭を明確化すること自体が重要な課題である。

例えば、哲学や生物学を考えてみよう。前者ならば二千年以上、後者でも二千年以上の蓄積がある学問領域である。そのため、対象が何か、その領域の及ぶところはどこかに関して、ある程度の共通理解がグローバルに成立している。しかし、ポピュラーカルチャー（とそれを対象とするポピュラーカルチャー学）の場合は、そういうわけにいかない。大

衆文化やポップカルチャーやサブカルとどう違うのかということに關しても明確な図式があるわけではない。とはいえ、

歴史的な視点でとらえると、産業革命を背景として十九世紀に登場した一般の人々が担い享受する新しい文化形態が、ポピュラーカルチャーである、ということとは間違いないだろう。

歴史哲学者ベンヤミンがいうように、この新しい文化の重要な特色の一つは、複製性である。ある文化要素が複製につくられ、人々のもとに届けられ、人々がそれを享受し所有する。「写真」がその原型／典型であるが、現在では、形や色はもちろんのこと、音や声、動くイメージなども、複製され、加工・編集されて、所有でき、再使用可能となっている。

もう一つの特徴は、それが、作品ではあるが、商品として人々の間に広まりがちである、ということだ。商品性と言っているだろう。例えばマンガは、旧来はマンガ雑誌という形の商品であった。アニメやドラマは、無料でテレビを通して視聴できるが、CMを伴い、DVDという形態の商品としても流通している。

第三に、こうした文化形態のさらに重要な特質は、主として一九六〇年代以降、(若い)人々のアイデンティティと深く関わり داشت ということである。ビートルズが世界の人々にこうした面で影響を与えたことは比較的良好に知られている。その一九六〇年代に若者であった世代は、いまや六十代。

ポピュラーカルチャーによって、アイデンティティを支え表わしてきた人々が多数派になったのである。

十九世紀に欧米が標準化した教養としてのハイカルチャーは、京都精華大学が創設された一九六八年ごろを一つの象徴的転換点として、後景へと徐々に退いていった。かわって、大衆文化と名づけられていたポピュラーカルチャーが、社会や文化の前景へと進出してきたのである。昨年開催されたロンドンオリンピックの閉会式は、このことを象徴的に表していたと言えよう。

このようにまとめてみると、ポピュラーカルチャーの文化要素は、複製的・商品的であると同時に、現在、その要素を享受する人々のアイデンティティと関わっている。あるいはアイデンティティを表すものとなっていると言えるだろう。さらにもう一步進めて考えるならば、その要素が他者とのつながりをも生み出している。朝の連続ドラマ「あまちゃん」のあるシーンについての感想が、他者と関わるきっかけとなったりするわけだ。こうしたアイデンティティとつながりの構築は、旧来の教養とは内容や次元の異なる新しい価値観を生み出しつつあるように見える。

このような状況は、根源的な思考を深化させることを一つの機能とする「大学」において、ポピュラーカルチャーを学問の対象とし、ポピュラーカルチャー学を組み立てていく仕

組みが必要であることを示している。つねに「新しい大学創造」を目指す京都精華大学としては、ポピュラーカルチャーを学問と教育の対象とすることが二十一世紀の「大学」にふさわしい方向と考えて、本学部を新設することとしたのだ。

さて、ポピュラーカルチャーも、よく考えたとそのジャンルはいろいろだ。本学はすでにマンガやアニメーションなどというジャンルに関しては、マンガ学部の開設で教育・研究の制度をつくつてきている。では今回は、どのようなジャンルに焦点を当てるべきであろうか。

特に若い人々の日常を考えると、二つのジャンルが彼らに身近なものとして浮かび上がる。ファッションとポピュラーミュージック（音楽）である。これらは、現在の若い人々の毎日の生活と密接に関係している。朝起きるとどの服を今日着ようかと考えるし、スマートフォンに取り込んだ音楽を聴くことでその日一日が動き始める。どのようなファッションを選択し、どのような音楽を選択するのか、そのことは「自分」とは何かということと密接に結びついている。このような「いま」を見据えて、ファッションと音楽を、学部のコース（領域）として設定することにしたのである。

ファッションに関しては、大学教育としては家政系の被服の領域や美術系でも教育されてきた。ポピュラー音楽も、音楽系大学で扱われつつある。しかし、京都精華大学では、ポ

ピュラーカルチャーという特殊であるが、グローバルな影響を「いまここで」与えている文化との関係で、ファッションとポピュラーミュージック（音楽）を考えていこうとしているのだ。

三 ポピュラーカルチャー学部の教育

（一）三つのコンセプト

では、どのような形で、ポピュラーカルチャーという領域を大学という制度の中で教育していくのか。ポピュラーカルチャー学部のカリキュラムなどを中心に、その形と内容を説明しておこう。あらかじめお断りしておくが、二〇一三年四月開設であるので、現在在學生は一年生のみ、実際の教育期間は半期四カ月にすぎない。したがって、具体的展開として四カ月の教育実績を参照するが、他の部分に関しては将来に向けての計画をもとに記述する。

ポピュラーカルチャーに関わる専門科目は、「つくる」「届ける」「考える」の三つのコンセプトを軸に編成されている。ポピュラーカルチャー学部は、学位「芸術」を授与する既存の三学部（芸術学部、デザイン学部、マンガ学部）から、学位の名称はもちろん、その設置目的や教育課程、教育手法なども引き継いだ。既存三学部が実技教育（実習や制作など）を

中心に据えてきたことを継承して、三つのコンセプトの中で特に「つくる」に基盤を置いている。

そのうえで、ポピュラーカルチャーの場合、人々が享受する文化であるという特性から、つくられたものを、楽しむ人々へとつなげる働きが重要となる。ファッションも音楽も、着る人、聴く人を前提とし、作り手は、そこへ向けて「届け」なければならぬ。

また、ポピュラーカルチャーは、十九世紀以来の伝統を踏まえつつも、先端的前衛的な新しい事柄を生み出すことで、ジャンルを広げ新たにし、今までにない魅力や楽しさを生み出してきた。そうした面では「考える」ことが最も重要な武器となる。

ただ、実は、ポピュラーカルチャー自体が、「つくる」「届ける」「考える」という三つの焦点をもった存在でもある。つまり、「つくる」「届ける」「考える」という三つのコンセプトは、ポピュラーカルチャーの特質と対応する、カリキュラム側の軸ともなっている、と了解していただけるだろう。

(二) 専門科目の構成

専門科目は六つのグループからなる。「基幹表現科目群」「表現融合科目群」「メディア制作科目群」「表現越境科目群」「実務研修科目群」、そして「学部専門講義科目群」である(図

を参照)。

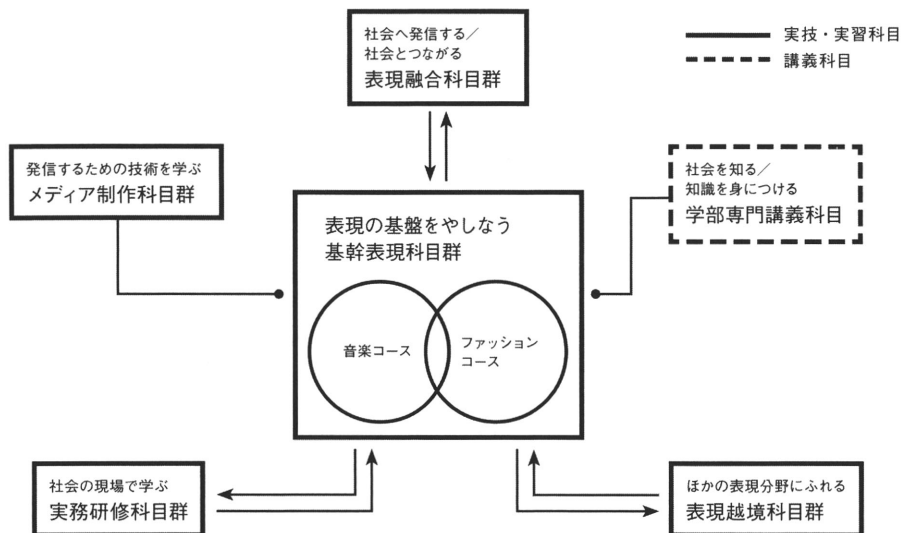
このうちカリキュラムの中心にあるのは、「基幹表現科目群」である。ここでは、現在も一線で活躍するミュージシャンやデザイナーなどを教員に迎えて、音楽とファッションの表現に関わる実技実習が展開される。

今期初めて行われた一年生前期を例に、やや詳しく見ておこう。

音楽コースでは、「音楽ソフト(DAW)の基本操作を習得し音響合成や打ち込みをする」実習(基礎実習1)、「さまざまな音を注意深く聴きそれらを素材とする作品制作を通じて、響きの特徴を繊細にとらえる耳を鍛える」実習(基礎実習2)、そして「録音されたものとしての音楽をつくるために必要な機材の取り扱いなどを基礎から学ぶ」実習(基礎実習3)が行われた。

ファッションコースでは、「リサーチやプレゼンテーションを通して自身のルーツを再考再確認しながら自分の価値観をつくりあげる」実習(基礎実習1)、「人間の身体、気持ち、着こなしの印象、服の素材・構造・機能・見え方などを分析することで作家としての身体性を獲得する」実習(基礎実習2)、そして「平面から立体の形をつくりだすためのパターンテックニックと縫製技術を習得する」実習(基礎実習3)が行われた。

専門科目の構成図



いずれも、学生の高校時代における経験や各自の進路希望などとは関わりなく、「音」と「服」との接し方を基礎から徹底的に学んでいくことを目的としている。

この一年次の基礎実習を導入に置き、二年次には制作実習、三年次に応用実習、そして、四年次に自由制作・卒業制作を履修する。このように音楽とファッションに関わる技術技能を確実に深め、着実に広げること、最終的に自分の表現を作品などとして社会へと公表する。

なお、一年生は「つくる」実習だが、二年生になるとそれに加え、もう一つの軸「届ける」実習も予定されている。「音楽／ファッションメディア」の「編集」を学び、発信を実践するというものだ。

また、一・二年生ではコースごとに全員が共通の実習を学ぶが、三年生以降は「つくる」「届ける」「考える」という三つのコンセプトのどれに興味をもつかで、実習内容を主体的に選択することになる。

ポピュラーカルチャールの場合、ジャンルも重要であるが、企画内容が人々をより惹きつけるという場合がある。本学部では、「表現融合科目群」を置き、コースやジャンルという枠にとらわれないプロジェクトを中心とする演習を選択必修としている。

また、特に「届ける」場合、発信のための技術が大切なも

音楽コースの実技授業風景



ファッションコースの実技授業風景



表現融合科目群では両コースの学生が共に学ぶ。
演劇に取り組んだ授業では、
学外公演を成功させた。

のとなる。このために、「メディア制作科目群」が置かれており、コースにかかわらず、例えば写真の技術を基礎から身につけていける体制を整えている。

最後に、「考える」という面に簡単に触れておこう。「考える」軸は、ポピュラーカルチャーに関わる専門的知識や先端的情報を学ぶ「学部専門科目群」が主に担っている。しかし、すべての実習演習でもつねに考える姿勢を養う運営が目指されている。

四 おわりに——どういう人材を育成するのか

音楽コースでもファッションコースでも、第一に、「つくる」ことを社会に出てからの目標とする学生を育てることにしている。前者でいえば、ミュージシャン、ソングライター、アレンジャー、トラックメイカーなど、後者でいうと、デザイナー、スタイリスト、パタンナー、マーチャンダイザーなどである。

この場合、自分で「つくる」ことをひととおり把握し、一人、あるいは仲間と共に音楽やファッションをつくっていくことができる人材を基本とするが、もちろん「つくる」会社や「つくる」関連企業で活躍できる人材を育てることをも目指している。

「つくる」に加え、第二に「届ける」ことに関わる人材を育成する予定である。具体的には、音楽もファッションも、プロデューサー、編集者、ディレクター、キュレーターなどである。個人で活動できるスキルを身につけてもらうが、もちろん「届ける」関連企業内で仕事ができる人材の輩出を目標としている。自らイベントを企画したり、音楽やファッションに関する情報をこれまでにない方向や方法で編集発信できる人、再編過程にある音楽業界やアパレル業界で、新しいシステムを構想構築する人の登場を目指している。

第三に、音楽やファッションを中心としたポピュラーカルチャー領域で、批評家、研究者、ライター、ジャーナリストとして活動、活躍する人材の育成である。ポピュラーカルチャーという領域の意味を考え、その意味を社会に向けて提示提案できる批評的人間の出現も期待している。

最後に、音楽とファッションの新しい関係性を考え提示する人材、音楽とファッションを基礎として、全く新しいアイデアを構想するアーティスティックな人材が生まれることも目標としている。

ポピュラーカルチャー領域は、今後も学問化・教育化されていくであろう。本学部は、マンガ学部とともに、そうした方向での先端的試みを引き受けていく予定だ。

佐々木 哲夫●東北学院大学文学部教授

世の光
わがほこり
いざほめよや友よ
(校歌より)

一 東北学院三校祖

今をさかのぼること百二十七年前、鹿鳴館時代がその頂点を迎えようとしていた一八八六（明治十九）年のことである。仙台に小さな神学校が創設された。その校名は仙台神学校である。

創設に関わった人物の一人が松山藩出身の押川方義おしかたまたよしである。彼は、藩校明教館で学んだのち、英学を修めるために藩派遣の留学生として上京し、箕作秋坪みつくりしゅうへいの三叉学舎、大学南校、横浜修文館で学んだ。横浜ではヘボン塾やバラ塾に参加し、一八七二（明治五）年に宣教師バラより洗礼を受け、日本基督公会（日本人による初のプロテスタント教会である横浜公会）の設立会員となった。

東北学院三校祖

（右より）押川方義、W・E・ホーイ、D・B・シュネーダー



仙台神学校の創設に関わった他の人物は、アメリカ合衆国ドイツ改革教会派遣の宣教師W・E・ホーイである。この教派は、海外伝道を行うにあたり、宣教師を派遣する最初の国として日本を選んだのである。日本派遣三人目の宣教師のホーイは、ペンシルバニア州ランカスター神学校を卒業後、一八八五（明治十八）年十二月に来日し、翌年一月にキリスト教伝道と学校設立を使命として仙台に赴いたのである。一八八七（明治二十）年十二月には、同教会派遣宣教師D・B・シュネーダーが来日した。翌年一月、彼もまただちに仙台に赴き、押川やホーイと一緒に仙台神学校教育の礎を築くのである。

仙台神学校が創設されて五年後の一八九一（明治二十四）年に校名を東北学院と変え、伝道者養成のための神学部三年だけでなく、英学を中心とした諸学を教授する本科四年を設置し、予科二年を併せもつ学制を整えたのである。

押川方義、W・E・ホーイ、D・B・シュネーダーの三人は、東北学院の三校祖と呼ばれている。

二 神学を志す青年たち

仙台神学校開設に応じた学生は、わずか六名であった。しかし、キリスト教禁令の高札が撤去されて間もない仙台の地

において、神学を志す青年が六名もいたことは、むしろ大いに評価すべき出来事であろう。その中に、仙台の南に位置する岩沼の地で教員をしていた島貫兵太夫もいた。洗礼を授けてくれた押川方義に師事するため、彼はただちに小学校の職を辞し、神学校に入学したのである。島貫は、東北学院の卒業後、「日本力行会」の前身である「東京労働会」を興した人物である。

最初の生徒6名と2名の教師
左から二番目の人物が島貫兵太夫



開国間もない日本で行われた米国人教師による洋学教育は、

米国のリベラルアーツ・カレッジやセミナリーでの教育を模範としたもので、当時の庶民が受ける教育としてはかなり高度な内容であった。邦語教科書はなく、しかも、日本語をほとんど話せない教師から英語で学ぶの

図1

仙台神学校の学科課程（1887年）

第一学年

英語（初歩読本、スペル、訳読、書取り、文法）、精神哲学、福音書史、新約緒論、新約釈義（ヨハネ伝）、神学概論、牧会学入門、信仰問答。

第二学年

英語（前記の他に作文、ワイザー『キリスト伝』、『アメリカ史』訳読）、道德哲学、聖史、旧約緒論、新約釈義（ロマ書）、神学、教会史、旧約神学概論、信仰問答。

第三学年

英語（文法、修辞学、万国史、ファネ『パウロ伝』訳読）、キリスト教倫理、弁証法の概論と原理、旧・新約釈義、神学、教会史、新約神学、説教学、信仰問答。

である。まさに肌で感じる異文化体験であった。のちに島貫は、ホーイの講義を次のように述懐している。

やがて、若いような年よりのようなアメリカ人のホーイという人がやってきた。かねてより知っていた押川方義先生がやってきて、何やら教え始めた。今迄は記憶さえよければ何でもなかったが、今度は天文とか地理とか、記憶ばかりでは駄目な教科が多いのでさっぱり解らない。……ホーイ先生のヨハネ伝の講義を押川先生が訳して聞かせる。けれども訳がまずいのか、いうことが難しいのかさっぱり

図2

東北学院設置願書 1891年

予科第一年

倫理講話、発音読法書取習字、発音書、取読法、綴字、訳読、習字和漢学、和文習字漢学、算術代数幾何、日本歴史、画学、体操。

予科二年

倫理講話、読法書取会話、読法書取会話英文文、読法会話作文、訳読、英文法、習字和漢学、算術代数幾何、日本歴史、画学、体操。

本科一年

倫理講話、読法書取会話作文、作文会話、訳読、訳読ヘスティング、英文法、和漢学、算術代数幾何、理化学、日本歴史、日本開化史、万国史、画学、体操

本科二年

倫理講話、英文法、修辭作文、訳読、和漢学、弧三角実地測量、英国史、理化学、万国史、米国史、独逸語、画学、体操。

本科三年

倫理講話、修辭作文、英文学、和漢学、解析幾何、微分、積分、動物学、植物学、天文学、化学、英国史、文明史或社会学、論理学心理学、独逸文学、拉典学。

本科四年

倫理講話、和漢文学、生理学健全学、地質学金石学、哲学史、理財学、倫理学、万国公法、独逸文学、拉典学、希臘学。

（他、神学部三年間の課程（省略））

われわれには理解できなかった。

これは、当時のいずれの洋学校においても少なからず見られた光景であろう。仙台神学校開設時の学科課程は、図1のとおりである。

三 東北学院設置

一八九一（明治二十四）年九月十一日付で、かねてより宮城県学務課に提出していた「東北学院設置願」（図2）が認可された。押川は、完成したばかりの仙台神学校校舎（東北



学院講堂)に全校生徒を集め、「東北学院の教育方針」すなわち建学の理念について語っている。雄弁家として知られた押川の弁舌が今なお聞こえてくるような演説である。

東北学院といへば、諸君も既に規則に於いて見らるゝが如く、

一般には高等普通教育を授くるを目的とし、また其の外に専門部を置く。目下は独り神学部のみを教ふと雖へども、将来に至りては、商業学なり、法学なり、文学なり、理学なり、凡そ今日日本子弟に必要な学科を授けんと欲する目的なり。……然らば基督教徒が基督教主義を以て教育を

施さんとするは、彼の世人が言ふが如く、決して狹隘淺薄なる目的を以て、教育の主眼となす者にあらざるなり。……然るに尚ほ我儕を目して偏頗なる教育を施し、子弟をして一も二もなく基督教の範圍に於て、強いて之を模型すること、菓子屋のおたふく面や、鬼面の菓子を作るが如く看做すは、愚昧の甚だしき者にあらずや。是れ畢竟我儕を知らざる者の妄語なるのみ。

今日、東北学院大学は、文学部、経済学部、経営学部、法学部、工学部、教養学部 of 六学部を擁し、一万二千名余りの学生が、大学礼拝を毎日ささげるキャンパスにおいて必修キリスト教学や教養科目や専門科目などの学びにいそしんでいる。創立時の理念は、幻に終わることなく今日においてもなお継承されているのである。

建学の理念は、学科課程だけでなく、キャンパスからも感じ取れるものである。すなわち、建物自体が醸し出す雰囲気、校舎から聞こえてくる讃美歌の歌声などキャンパス全体が、建学の理念を告げ知らせているのである。

四 苦難と忍耐

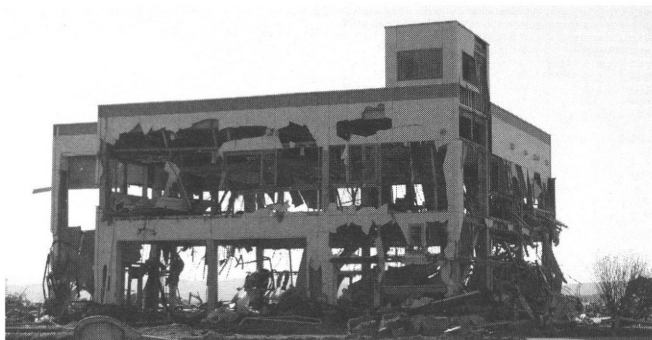
東北学院建学の理念は、三校祖に起因するものではなく、

彼らが抱いていたキリスト教信仰に基づくものである。それゆえ東北学院のキャンパスには、三校祖の銅像や肖像画ではなく、聖書の言葉が少なからず掲げられている。例えば、各キャンパスの図書館には、「エホバを畏るるは知識の本なり」（土樋キャンパス）、「地の塩、世の光」（泉キャンパス）、「真理はあなたたちを自由にする」（多賀城キャンパス）の聖句が掲げられている。

建学の理念とは、苦難に直面するとき、私どもの歩むべき道を照らし出してくれる光のようなものであった。例えば、学資支弁が困難な学生を支援するために、学校設立時から一九一二（大正元）年までの間、労働会が組織された。労働会とは、学ぶことと働くこと（農業、新聞・雑誌の取次販売、牛乳配達、牛肉・味噌醤油・ランプ用石油の販売、鶏卵売り、建物の清掃など多岐にわたる働きに携わった）を両立させようとしたもので、最盛期には学生の半数ほどが参加した。それは、貧富の差の解消を目指す平等思想や労働を重んじる価値観など、キリスト教の理念に起因するものだった。

また、一八九九（明治三十二）年、宗教教育や宗教行事を禁じることと徴兵猶予や上級学校進学の特典を連動させた「文部省訓令第一二二号」の影響によって、学生数が激減する危機に見舞われた。さらには、第二次世界大戦の敗戦の兆しが濃厚になった一九四三（昭和十八）年、東北軍管区司令官

被災した東北学院シーサイドハウス



が東北学院に対し「不急の教育機関を廃校とし、校舎を軍が接収する」との命令を下す事件が起きた。同窓生などの尽力の結果、航空工業専門学校を設立させることによって、その危機を乗り越えることができた。確かに、試練とともに、それに耐えられるよう逃れる道をも備えられたのである。

二〇一一（平成二十三）

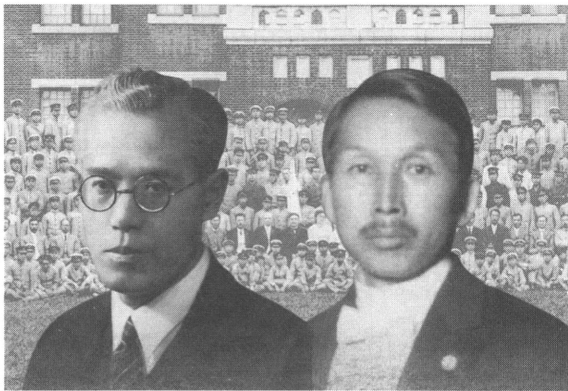
年三月十一日、東日本大震災が起きた。東北学院大学は、キャンパスの建物の被害だけでなく沿岸地域にあった東北学院シーサイドハウスが崩壊するなど、甚大な被害を被った。ただちに災害対策本部を設置して安否確認を行い、東北学院七百名ほどの教職員全員の無事を確認したが、一万五千名ほどの園児・生徒・学生のうちの生徒二名と学生五名が犠牲や行方不明となった。家族の犠牲や家屋の流失・損壊・

浸水などの被害に遭った者も少なからずいた。校舎は復旧工事により以前の姿を取り戻したが、建学の理念に関しては、なぜこのような災厄が起きたのかとの思いが教職員の心に生じたことと推察された。四月十八日に追悼礼拝で始まる教職員全体集会「東北学院大学の復興に向けた全学の集い」が開催された。そこにおいて、東北学院がこれまでの歴史と伝統にとどまること、すなわち、建学の理念を再認識することができた。学校から何を与えられるかと期待するのではなく、自分たちが学校に何をなすことができるかとの思いで一致する雰囲気包まれたのである。教職員や学生・生徒の忍耐力を集めることによって、東北学院は存亡の危機から脱したのである。

五 思想と文化

建学の理念に基づく学びは、さまざまな思想や文化を生み出す原動力になる。例えば、杉山元治郎は、大阪府立農学校を卒業し、和歌山県農会技手兼書記として働いたのち、一九〇五（明治三十八）年に東北学院神学部に入學する。杉山は、シュネーダーの講義「神学概論」において「キリスト教社会学、例えば、貧民に対する態度、社会の歴史、自殺に関する態度、大いに研究せざるべからざるものなり」を聴き、彼自身が抱

く社会正義の思いと共鳴するものを覚え感銘したという。卒業後牧師となり、特に小高教会では私立小高高等農民学校を開設している。沖野岩三郎が「私は極端なる程熱狂な賀川豊彦を紹介すると同時に冷静温厚な新人杉山元治郎を紹介したい」と述べているように、やがて、賀川の労働運動と相対する農民運動に参加する。日本農民組合を設立し、初代組合長に就任する。その後、歯科医師となり医院を開業、衆議院議員の当選を重ね副議長に就任、東北学院理事長を務めるなど活躍の分野を広げた。



鈴木義男(左)と杉山元治郎(右)

躍の分野を広げた。

鈴木義男は、牧師であつた父の命に従い白河尋常小学校卒業後、一九〇七（明治四十）年、シュネーダー院長を慕つて十三歳で東北学院普通科に入學した。彼は、東京大学卒業後、東京、東北、法政、専修、青山学院各大学などで教鞭を執り、また、弁護士、衆議

院議員、司法大臣、東北学院理事長などの要職を務めた。特に、帝人事件被告人、また河上肇など治安維持法違反事件被告人の弁護士として「人間尊重の精神」をもって活躍した。後年、東北学院入学の思い出を次のように記している。

私が東北学院を慕って幾多の県公立中学校があるのにそれを飛び越えて遙々筏を仙台に負いましたのは、……茲に東北の聖者（シュネーダー院長）ありとの噂に魅せられた為でもあったのであります。……先生は一同を集めて東北学院教育の使命を説示されて将来国家有用の人物になる為一生懸命に勉強せよと云われたのであります。

東北学院の建学の理念に触れた器は、大正デモクラシーに深く関わった前述の二人だけでなく、文学においても少なくない。神学校設立の三年後、一八八九（明治二十二年）に仙台神学校文学会が発足し、その機関誌として一八九一（明治二十四）年ごろに『仙台神学校文学会雑誌』が作られた。これは手書きの一冊もので、食堂などに置いて皆で読む回覧雑誌だった。東北学院改組とともに雑誌も『東北学院文学会雑誌』に変わった。一八九三（明治二十六年）年から『東北文学』と誌名を改め、活字印刷となり、文系学問に関するさまざまな作品が掲載された。

例えば、一八九六（明治二十九年）年九月に作文教師として赴任した島崎藤村（春樹）の翻訳や文章も掲載されている。『若菜集』時代に以下の記述がある。「あの仙台へついでからといふものは、自分の一生の夜明けがそこではじまって来たやうな心持を味ひました。……実際、仙台での一年は、楽しい時であつたと思ひます。私はそれまでに経験して行つた劇しい精神の動揺をも、それを思ひおこすこともできるやうな静かなところへやうやくのことで自分の身を置きえたやうな心持でした」と述懐している。

「藤村は、仙台に行つて夜が明けたこと、もしくは、初めて自分の上にも太陽が昇ることがあるのだということを仙台で感じた。そのような夜明けの気持ちを藤村はあちこちに繰り返し書いております。そして、この仙台の地でほとぼしるように詩が湧いてきたと言ひます。それが『若菜集』にまとめられるのです」と評されているとおりである（『東北学院資料室』第九号、第十一号、『東北学院大学 教職員修養会・キリスト者教員研修会報告書』第十四号）。

その他、詩人・作家の岩野泡鳴、京都大学教授となつた栗原基、冒険小説家の押川春浪（方義の長男）、『クオ・ヴァーデイス』を紹介した佐藤迷羊、平凡社大百科事典を編集した木村久一などの名前を挙げるができる。

東北学院は、学院史に関する調査・研究を行い、『島崎藤

マンガの可能性を広げる 「実験」の場

伊藤 遊 ●京都精華大学国際マンガ研究センター研究員

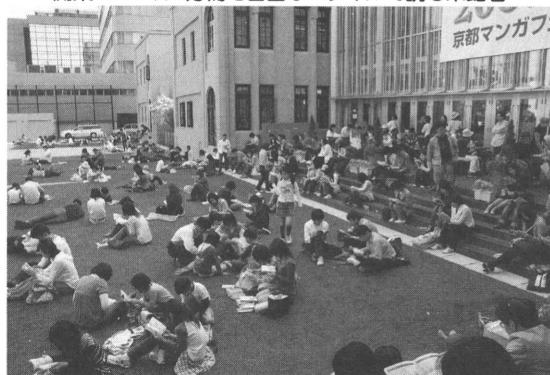
●はじめに

「京都国際マンガミュージアム」は、マンガ学部を擁する京都精華大学と京都市の共同事業として、二〇〇六年にオープンした日本初の総合マンガ文化施設である。江戸後期の戯画や明治・大正・昭和初期のマンガ雑誌、戦後の貸本マンガといった歴史的資料から、海外で出版されたコミックス、現代の人気マンガまで、文字どおり古今東西のマンガ資料約三十万点を収集・保管した図書館であると同時に、これらの資料を使った研究の成果を、展示という形で発表している博物館でもある。

●マンガ研究ネットワークのハブとして

マンガミュージアムには、二割近い外国人来館者を含め、年間二十万以上の人が訪れている。京都の新しい名所になりつつあると言っても過言ではないが、こうした数字をキープできている理由の一つは、年間十本ほどのマンガに関する展

開架のマンガ5万冊を自由なスタイルで読む来館者



る研究員が所属しており、そのうち六名がマンガミュージアムに常駐している。マンガに関する施設は全国に五、六十館あると言われているが、驚くことに、マンガ研究の専門家が常駐している施設というのは、当館を含め数館しかない。

マンガミュージアムは、単なる娯楽施設であることを第一義としていないので、展覧会やイベントにしても、期間中にどれだけ人が入ったかという数字以上に、その過程や、それ

覧会や、マンガ家の講演会、コスプレ交流会、ワークショップといったイベントを次々と展開し、話題を提供し続けているからであろう。これらのコンテンツのほとんどを企画しているのは、ミュージアムに併設された「京都精華大学国際マンガ研究センター（IMRC）」だ。ここには、マンガ研究を専門とする



がきっかけで得られた作家・出版社・研究者といった関係者とのネットワークこそを重要視している。そのかいあってか、マンガミュージアム／国際マンガ研究センターは今や、マンガに関する情報の集積地、国際的なマンガネットワークのハブとして機能しつつある。

京都精華大学がこうした形でマンガミュージアムを支えることができているのは、四十年にわたるマンガ教育と、二〇〇

一年の「日本マンガ学会」の設立に大きく関わり、その事務局をマンガミュージアム内に置いていることも大きいだろう。

●マンガ教育・人材育成の現場として

一方、大学が運営する文化施設ということもあって、マンガミュージアムは、教育・人材育成の現場としても機能している。

マンガというメディアは、情報をわかりやすく伝えるという優れた機能をもっているが、世の中には、そうした利点を生かした「情報マンガ」「学習マンガ」があふれている。マンガミュージアム／国際マンガ研究センターでは、自社の歴史を紹介したい企業から病気の説明を患者にしたい医者まで、さまざまなクライアントからそうした「情報マンガ」の制作依頼を受けている。そして、それらのマンガ制作を、人材バンクに登録された京都精華大学の在学生や卒業生に依頼しているのである。そこで作られたマンガ作品は、マンガミュージアムでも公開され、一般の来館者の目に触れることで、さらにその精度を上げていくことになる。

また、マンガミュージアムのスタッフの一部は京都精華大学の在学生、卒業生であるが、彼らには、特に来館者とのコミュニケーション能力が問われる「似顔絵」コーナーや、ワークシoppコーナーのスタッフとして働いてもらっている。生の現場におけるその経験は、他の教育施設ではなかなか得られない〈教育〉そのものだろう。

●おわりに

マンガは今や、単なる娯楽としてだけではなく、さまざまな可能性が期待される存在になっている。京都国際マンガミュージアムは今後も、マンガファンが単純に楽しめる場所であると同時に、マンガがもつそうした可能性を実験する場でもありたいと考えている。

ブタもウシもウマも 大切な標本

安齋 寛 ●日本大学短期大学部(湘南)教授

歴史 日本大学生物資源科学部のキャンパスは、神奈川県藤沢市の小田急江ノ島線六会日大前駅から徒歩三分の好立地にあり、正門脇の木立に囲まれて四階建ての博物館がある。

当博物館は、教育研究用に保管されている骨格標本や標本模型類を有効活用するため昭和四十九年に設置された標本模型管理委員会が前身である。昭和五十三年に標本室が設置され、昭和六十二年から三年の準備期間を経て、平成二年に博物館相当施設としての指定を受け正式に開館した。

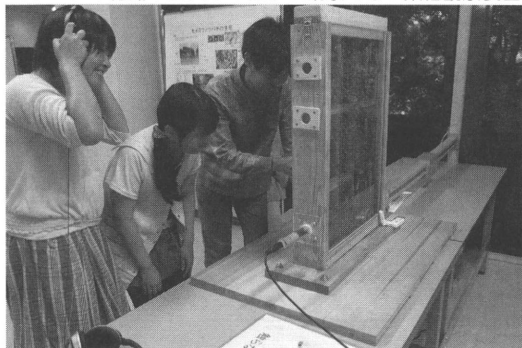
施設 当館は昭和五十三年に事務室と講義室のある棟の一室を使ってスタートしたが、現在は一階と三階のフロア全部を展示室(九八三平方メートル)と収蔵庫(二二四平方メートル)とし、四階部分の講義室を講演会などで使用している。近い将来、二階部分も展示室として改修し、博物館専用棟として整備する計画が進んでいる。年間の来館者数は開設当初は数百人だったが、企画展を定期的に開催するようになってから順調に増加し、現在では二万八千人前後で推移している。

標本と展示 収蔵されている標本類は昆虫、植物、骨格、

液浸など約三万点に及び、一階展示室には、小さなネズミからゾウやキリンといった大型の陸上動物、そしてゾウアザラシやミンクジラなど巨大な海棲哺乳類の全身骨格標本や剥製標本が、ところ狭しと並べられている。また、野生動物の標本だけではなく、ペットであるイヌや家畜のウシ、ウマ、ヒツジ、ブタなどの標本も多く展示しているのは農学系である当館の特徴である。標本の多くは実習で訪れる学生が観察しやすくするため、あえてケースに入れない展示をしているが、来館者にはこれが好評で、展示室に足を踏み入れたとたんに、実物の質感、迫力に思わず喚声を上げる親子の姿が多く見受けられる。三階展示室には、古い農機具をはじめ、昆虫や植物標本、稲の起源に関する展示、深海ザメなど海洋生物や漁具、木材、木製品などの標本があり、海から森まで大学の研究教育内容に沿って展示分野は多岐にわたっている。

標本のほとんどが実物で、その多くは長い時間をかけて収集されたが、中には日本産のトキのように絶滅してしまい現在では入手不可能なものもある。また、ホワイタイガー(ベングアルトラ)やオランウータンなど、ワシントン条約により規制されている貴重な動物が、動物園で獣医として働いている卒業生の縁で寄贈される機会に恵まれているのは、同じキャンパス内に獣医学科がある当館の強みである。

ミツバチの行動や出入りの様子を観察できる巣箱観察装置



近年力を入れているのが生態展示で、一階エントランスに魚などの水棲動物の展示水槽があり、三階にはセイヨウミツバチの巣を展示している。ミツバチの巣は入り口が博物館三階のベランダにあり、これを通路で展示室内のガラス張りの巣箱に接続している。透明な巣箱では、産卵する女王蜂や、花の場所を知らせる働き蜂の8の字ダンスの様子が直接肉眼で観察できる。巣にとりつけられたマイクで集めたブンブンという羽音をヘッドホンで聴く小学生の顔は真剣で、五感に訴える展示のインパクトの強さを実感している。

企画展 当館では平成二十年から定期的に年二回の企画展

を、生物多様性と人間との関わりという一貫したテーマで開催している。これまで取り上げたのは、ジャイアントパンダ、トキ、ツシマヤマメコ、ヤンバルクイナといったレッドデータブックに記載されている絶滅危惧種であり、これらの保護の現場に、本学の関係者が積極的に関わっている様子を紹介してきた。また、絶滅に瀕する特別な生き物で

なくても、海や森、里山といった身近な自然の生物多様性について、臨海実験場や演習林といった校地の周辺の生物相を紹介することを通して、その大切さを積極的に訴え続けている。

教育普及活動 平成五年から小中学校及び高等学校の理科教員を対象とした理科実験セミナーを年二回開催している。

夏休みには下田臨海実験場や水上演習林、富士自然教育センターなどの野外で開催され、冬は湘南キャンパスの実験室で実施されている。内容は、夏は生物の観察や参加者が勤務先の学校に持ち帰っても使える標本の作製、冬は教科書に掲載されている教育現場で実施するのが難しい実験を体験することである。また、平成二十年度より、小中学生を主な対象とした「むらさき草の丘サイエンス・セミナー」を開催している。これは、夏休みの宿題のお手伝いも兼ねているが、理科好き生物好きの子どもを増やすのが大きな目的の一つである。

学生ボランティアの養成 平成二十年度より、当館の活動に学生ボランティアを導入した。学内で公募する形をとっており、学芸員を目指す学生に限らず、学科や学年の枠なく多くの学生が活動している。このボランティアでは、博物館業務に興味のある学生が、実際に館内で企画展の準備や標本管理、来館者への応対などの経験を積むことができる。学生たちは講義や実験の合間に手伝いに来てくれるが、その才能やアイデアにはときに舌を巻くことがあり、生物好きの学生たちにとっても、日頃学んだことを活用し、自己実現できる場となっている。

歴史的建造物を 生かした博物館

尾崎 健夫 ●早稲田大学會津八一記念博物館事務長

●博物館開設の経緯

早稲田大学に博物館を造ろうという気運は古くからあった。書家・歌人としても優れた足跡を残した會津八一博士、秋艸道人（一八八一―一九五六年）は、東洋美術の研究者であり、教育研究において実物に触れることの重要性を説いた。また、私財を投じて中国の明器、銅鏡、瓦磚など四千点以上を集め、学生のための美術・考古資料とし、一九二六年にはすでに大学博物館の建設を提言していた。

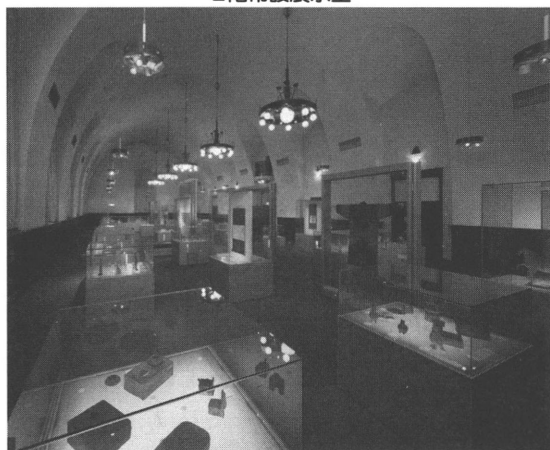
現在、早稲田大学會津八一記念博物館のある二号館は、かつて多くの学生、教職員、校友に親しまれていた図書館であった。しかし、一九九一年に新しい設備を具備した中央図書館が竣工してからは、二号館の図書館機能のスペースの一部が移転により空き、一九九五年からそのスペースの有効利用が学内で検討され始めた。やがて博物館の開設に関する懇談

会や委員会などでの審議を経て、二号館を新たな博物館として改修することが決定し、展示の内容やその方法が具体的に検討された。その結果、一九九八年五月には、この歴史的建造物を最大限に活用した形でリニューアルが実施され、本館が開館するに至った。ともすればスクラップ・アンド・ビルドでキャンパス計画が更新されていく昨今、文化財としても価値の高い建築を生かしつつ博物館として再生が可能になったことの意義は計り知れない。會津博士の長年の夢は七十二年たって、ようやく開花したことになる。

●博物館の建築

この建築は、本学理工学部の中井兼次教授らの設計により一九二五年に竣工し、ほぼ同時代に竣工した大隈記念講堂、坪内博士記念演劇博物館とともに本学の名建築の一つと見なされている。一九九八年の開館に際しては、理工学部建築学科の古谷誠章教授により、一階にある柱頭に装飾が施された六本の柱は、来館者を格調高く出迎えるホールとして保存修復された。また、高く弧を描いたボールト天井のある大閲覧室であった空間も、ほとんど改変されずに常設展示室として生まれ変わり、鑑賞者を優しく包み込む空間のしつらえであり続けている。階段の踊場の壁には、横山大観・下村観山合

2階常設展示室



作の大壁画「明暗」が、図書館であった時代から引き続いて建築と一体化している。

建築の各部位と、展示される各資料や作品が相まって、長い歴史のうちに蓄積された早稲田文化を静かに語りかけていることが、この博物館の最大の特徴といつてよいであろう。

一九九九年には、東京都歴史的建造物に選定され、また二〇一〇年の耐震改修工事を経て二〇一二年には、ロングライフビル推進協会によるBELCA賞も受賞した。

●資料の展示 及び博物館 の活動など

本館には、會津八一が残した東洋美術コレクションをはじめとして、近代日本絵画、アイヌ民族資料、さらには本学の考古学研究の成果ともいふべき多くの発掘資料など

がある。これらの資料は、広く一般に展示・公開するとともに、資料に関する情報を蓄積することで、学内外の教育研究にさまざまな活用されている。所蔵資料は一万八千余点であるが、段階的に電子化しデータベースとして、その一部を公開している。

二階の常設展示室では、大展示室中に多数の小ケースを配置し、各展示ケースに椅子と図録を内蔵させ、来館者は自由にそれを取り出して鑑賞することができる。

一階の企画展示室では、収蔵資料をテーマ別に取り上げ、開館以来、年数回の企画展を開催している。テーマはおおむね近現代美術展、考古民族資料展、會津八一もしくは東洋美術関連資料展を、それぞれ年一回程度開催している。さらに二〇〇九年からは、富岡重憲氏の東洋陶磁、近世禅書画、茶道具などのコレクションに特化した展示のため、同コレクション展示室が増設され、年数回の展示替えをしながら展示を行っている。本館の活動、館蔵資料やその整理、研究の成果の一端は、年刊の「研究紀要」により報告している。

なお、本館の展示とその利用は、学内教員による授業だけでなく、社会人一般の方々に向けたエクステンションセンターの講座、学芸員資格課程夏季集中講座、展示内容を解説するギャラリートークなどの多様な機会を通じて、一定の社会的役割を果たしつつあることも付記したい。